

平成10年度 和歌山県名匠

【那智黒硯製作】

な ち ぐろ すずり せい さく
やま ぐち い さ お
山 口 伊 左 夫

【現住所】那智勝浦町

【生年】昭和19年

(号 光峯)

業績及び経歴

昭和19年那智勝浦町で那智黒硯製作を営む父のもとに生まれる。

この那智勝浦町に隣接する新宮市の大浜海岸や佐野海岸には、古来から那智黒石が存在し、平安時代以降、この地を訪れた人々が、那智参詣の証としてこの石を持ち帰ったと伝わる。

那智黒石は、粘土質を多く含む泥が固結して生じた堆積岩の一種であり、黒色かつ緻密な岩石で、硬質なため、こうして各地に持ち帰られた石が、硯や試金石、黒基石として活用されてきた。

氏は18才の高校卒業と同時に、原石の自然な姿を活かした那智黒硯の製作を父から手ほどきを受け、原石の採取から形づくり、彫りや磨きに至るまで、多種にわたるノミや砥石を巧みに使い分け、硯の製作に取り組んできた。

その製作は、硯の文字のごとく、石の特性を見極めることに始まり、終わると言っても過言ではない。

この様な、石の特性を見極め、硯の製作に取り組むなかで、氏は、堆積岩である那智黒石のうち珠石と呼ばれる、核を中心として周辺に堆積した那智黒石が、特に硯石としての特性に優れていることを見出し、それまでの作風を打破し、珠石の素材を活かした楕円状の硯を製作した。この硯は、手にすると伝わる氏の温かな人柄と製作にかける情熱から、多くの書道家に好評を得ている。

この珠石で硯を製作するためには、その性質が那智黒石の中でも特に硬質であるため、彫りや磨きに多くの時間を必要とすることにより、他に製作している者はいない。

地域に伝わる伝統工芸品である那智黒硯に新たな息吹を加え、その普及と魅力を次代に伝えるため、氏は現在もその技術を磨き続けている。